

あるがままを見ることでしか見えないものがあります。新しいものを見つけたい、あの人のような作品を作り出したい、そういった思いは多くの人が抱くことと思います。しかし、自分を信じ、疑い、向き合い続けた先に見えるものこそ、あなただけのものです。そんな作品を書いていただけたらと思います。今月も良い作品が多くありました。

ラーメンを啜る

わたしの目に映る

油まみれのこの世とわたし

さいう 愛知県

→視覚からのアプローチが上手な作者。かけていた眼鏡にラーメンのスープが飛んだ瞬間なのだろうが、それを通して世の中の汚れとそれにまみれた自分をも見ている。「この世」が油に汚れているという、独特な空間の把握。掲出作品は味覚→視覚、佳作としたが「イヤフォンを外し いちめんの菜の花」は聴覚→視覚と、描写の展開が巧みである。

虫の闇ギターの内に木の素肌

中矢 温 東京都

→素肌とは哺乳類、特に人間にのみ使われるものだが、木にも素肌を感じた発見。また、生きている木ではなくギターというのが良い。呼吸をやめた木に、未だ宿る温度を感じる。サウンド・ホールの中に落ちた虫の視点で語られている。胎内のようなものである。

今日もまた、

同じものばかり見ていたね

夕日が私の網膜を焼く

猫谷 圭希 広島県

→眼球の表面にあるのが角膜、「網膜」はそのちょうど裏側に位置する。そんな深いところまで夕日が差し込む無防備な体をもつ作中主体。同じものを見続けたことを語りかけながらも、視界の記憶まで焼かれるように網膜に夕日が沁みていく。見たものだけでなく、二人の繋がりも焼かれていく。

ちょうちょ産む瞬きをしてお昼寝

起きたらうーばーいーつしよっか

藤ほたる 神奈川県

→上句の破調に微睡んでいる姿が浮かぶ。「ちょうちょを産む瞬き」は実際には起きないことだが、二人には見えている。ウーバーイーツの平仮名表記と「しよっか」の喋り言葉

に作中主体が安心しきっているのが伝わるし、下句は定型に収めているため安定している。一見柔らかすぎるようにも感じるが、隅々まで丁寧に作られた作品。

空蝉や

二十二リットル

溜めた小便

しばらくやまもと。 東京都

→二十リットルのペットボトルは六本売りが多い。それだけでも存在感があるのに、二十二リットルとは。なぜそんなことをしたのか、なぜそんなにも溜めたのか。外に出なかったからだろう。引きこもり続けた壮絶な孤独が、小便に込められている。排泄物の汚れが、この世に生きている自分の身体そのもののよう。

精神をてめえで保つために要る

風呂と散歩とジャムヨーグルト

松下 誠一 東京都

→「てめえ」という粗暴な言葉遣いと、健康的なものたちとのコントラストが可愛らしい。自分の精神を保つために必要なことは、実は特別なものではない。生活において、繰り返せることにこそ魂は宿る。下句の軽やかさ、「ジャムヨーグルト」に作者の個性が見える。

滝つぼの

鎮まる水面

秋浮かぶ

トラノオノキスゲ 群馬県

→どんな「秋」が浮かんでいるのだろうか。美しい髪の女性か、深紅の林檎か、紅葉か、作者にしか見えない「秋」そのものか。神聖な空間を思わせる「鎮まる水面」に、特別な光が差し込んでいるようだ。